

# 魯迅の阿Qと井伏鱒二のエイ

## - 「阿Q正伝」と「丹下氏邸」について -

邢 雪 艷

(前文教大学附属教育研究所客員研究員 / 河北大学外国語学院)

Lú-Xùn's "ĀQ" and Ibuse Masuji's "Ei"  
; "ĀQ(qǐu)Zhèng Zhuàn" and "Mr.Tange's Mansion"

XÍNG XUĒ YÀN

(ex-Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University;  
Hobei University)

### 要 旨

「丹下氏邸」は1931年2月「改造」に発表された井伏鱒二の短篇小説である。「黒い雨」ほどの大作ではないが井伏鱒二の数多くの作品の中で重要な一席を占めている。深い谷間の村、面白い方言及び謎のような人物性格、作者の円熟した滑らかな言葉などは作品に永久の魅力をアピールさせている。中国のプロレタリア文学作家魯迅先生の「阿Q正伝」という中国の半封建半植民地時代、中国人の精神状態を反映する小説と結び付け比べながら、「丹下氏邸」を読み直そうと思っている。

中国と日本は東アジアにある一衣帯水の隣国である。両国はそれぞれの歴史、地理、文化を持っていると同時に長年友好交流の結果、共通するところも少なくない。特に日本は歴史上、中国からいろいろなことを習い、思想文化から、日常生活まで、中国の思想文化は日本社会の各方面に沁みこんでいた。中日両国の人々は他の国よりもっと近い東洋文化の雰囲気には生きている。このような東洋文化に生きている人間のイデオロギーはだんだん共通する所が出てくるのではないかと思っている。特に自由平等の新時代が来るまで暗い社会背景にあがき暮らしてきた人々にきつと通じているところがあると信じている。本文では二篇の小説の主人公阿Qとエイの比較によって彼らの共通点、相違点、また二篇の小説の書き方、作者の意図などの方面の共通点と相違点を明らかにする。

### 1. 両作品の共通点と問題点

最近、松沢先生のご指導で井伏鱒二の「丹下氏邸」という小説を読んだ。「丹下氏邸」は井伏鱒二の農村文学の一つで昔の田舎の物語である。主人公の一人は地主の丹下氏、もう一人は男衆で、五十七歳のエイである。エイは五十七歳であるが昼寝したために怠け者

だと言われて、折檻された。エイの女房、オタツは嫁入りした翌日から奉公に出ていて、未だに同じ家で世帯を持ったこともなかった。オタツは亭主がへまな事をして主人に叱責されたときにだけ、亭主のへまを詫言に來るのである。方言がたくさん用いられて、作品全体にユーモアの雰囲気が漂っているが読んだ

後笑いたい気持ちが起きないばかりか、言葉に表せないほど悲しい、寂しい、何にか詰まったような気持ちになった。この気持ちは、なんとなく、魯迅先生の[阿Q正伝]という小説を読んだときの気持ちに似ている。なぜであろう。作者である魯迅先生と井伏鱒二先生が似ているかそれとも、エイと阿Qが似ているか、それとも作者の表現、風格が、どこか近いのか。突然阿Qと結びついて、自分は中国人としての[丹下氏邸]論を書きたいという衝動が湧いてきた。

(1) まず、阿Qとエイの名前と日常生活について、はじめたいと思う。阿Qは魯迅先生が中国の辛亥革命の不徹底さを風刺するために作った人物である。阿Qは、100パーセントのプロレタリアである。彼の境遇はエイより可哀相だ。家族もないし家もない。未荘の産土神の祠堂に住んでいる。日雇いとして時々雇われるが決まった仕事もなかった。麦打ち時には麦打ちを、米搗き時には米搗に舟漕ぎには舟漕ぎをやった。生きていくために選ぶ自由はまったくなかった。エイが捨て子だとすれば、阿Qは一生浮浪人である。一番可哀相なのは自分の名字さえ知らなかったことだ。古い中国では自分の名字を知らないということは自分の祖先を忘れたと同じことであり、それは最大の恥である。従って普通の人は命より自分の名字を大切にしていた。ところが阿Qは確かに知らなかったのである。ただ一度名字を聞かれたときに趙かも知れないと言ってしまったが、翌日酷く叱られた。と言うのは趙は地元で名声と人望が集まる趙旦那の名字であるからだ。阿Qのような誰にも軽蔑されている小人物は同じ光栄たる趙という名字を持つはずがないと思われていた。魯迅先生は阿Qという名前をつけて、名字をつけなかったのは意識的に阿Qの孤独すなわち、頼りになるものは何もないと言う貧苦状況を読者に伝えたかったのではないかと思う。阿

Qよりエイのほうは幸せなようである。谷下英亮という美しい名前を丹下氏から名付けられたのである。丹下氏の話で言うと、[したけど、私らが内のエイに尽くしてやったことは、いえば、存外あの子に谷下英亮という名前をつけた]とぐらいかもしれない、というのである。いうまでもなく、美しい名前を持っているのは雇主丹下氏からの恩恵で感謝すべきであるかもしれない。オタツからの手紙が来たときはじめてその本名が知られた。丹下氏は男衆を呼ぶときはいつもエイ、エイと言った。これはただのことであるかもしれないがこのただの事に何か含まれているのではないかと思う。小説の中に丹下氏と木材商人の交渉場面があった。「丹下氏は帽子を脱ぎ、相手の男は、鉢巻きを脱いで二人が挨拶をした。かれらは膝頭を手で押さえ、お辞儀をするたびに膝を折り曲げる姿で挨拶した。」という文から見ると当時は礼儀が厳しい時代であって、平等の立場にある人はしっかり礼儀作法を守ったと思われる。男衆谷下英亮はただエイ、エイと呼ばれたのは言うまでもなく当時の身分制度で、エイはただの男衆、雇農、下僕であり、自由のない主人の言いなりでなければ折檻される可哀相な小人物なのである。だから、谷下英亮と言う名前は小説の中に二三回しか使われていなかったのは偶然ではない。魯迅先生が阿Qに名字を付けないのと一緒に、男衆という人物の地位と生活状況を表現したためではないかと考えられる。また、「阿Q正伝」の趙旦那は阿Qの趙という名字を許せなかったのに対して丹下氏は男衆に谷下英亮という名前をつけたからといって日本の支配階級である丹下氏は中国の支配階級の趙旦那連中より親切だとは言えない。というのは中国人と日本人は名字、名前に対するイメージが違っていただけである。中国の名字は血の繋がりを表していると思われた。同じ名字を持っている人は何百年、何千年を遡って、きっと血が繋がって、同じ祖先であ

と思われていた。趙旦那は阿Qの趙という名字を許さないのはここにあるわけだ。日本は違っている。周知のように日本は本来名字がなかった。明治維新後戸籍を作るために臨時につけたのだ。臨時につけられたのだから、どこから来たか分からなかった捨て子に名前をつけたのはそんなにありがたいことではなかった。だから名字を持っていない阿Qと美しい名前を持っていながら使われないエイと一緒に、両方とも封建社会の一番底辺に暮らしていた苦しい農民の姿である。彼らは自分の生活を選ぶ権利はない。五十七歳のエイは昼寝だけでそんなに残酷に折檻されるし阿Qはちょっとしたことで、何度も殴られたりした。ここから彼らの日常生活状況が伺える。

## (2) 孤苦の独身生活

阿Qとエイのもう一つの共通点は二人とも独身生活をしている孤独な人間であるという点である。「丹下氏邸」に丹下氏と一緒に暮らしているエイは妻を持っていたけど結婚した妻は翌日から奉公に出てしまって、エイはずっと独身生活をしていた。阿Qは全然結婚したこともないものだ。食うや食わずの生活なので妻を持つはずがないと思われていた。でも阿Qは人間であるから人間の本能を持つわけだ。ある日尼さんの顔に触ってから突然ふわふわになってしまって、女、女と考えはじめた。ついに趙家の下女である呉媽に言い寄った。「おめえおらと寝ろ、寝ろ」と言う情緒のない求婚をしてしまった。阿Qは世代を継ぐ為にこのような突飛な行為をしたにしてもあるいは求婚のやり方が荒っぽすぎるにしても殴られるほどの間違えではないと現代人には思われるが阿Qは趙旦那に酷く殴られた。それだけではなくて唯一財産の上着も謝罪のために取られてもっと貧苦に陥ってしまったのである。というのは趙旦那連中の考えでは阿Qのようなものは家族を求める権利さえあるはずがなかったからである。その点阿Q

よりエイのほうはまだ幸せなように見える。折檻されてからの翌日オタツから「おんもと様を懐かしくてなりません。……おんもと折檻を受けてと帰りには泣きかえりました。これで十二回目の折檻を……」という手紙が届いた。手紙の内容からオタツがどんなにエイの事を心にかけているかが伺える。だからといってエイのほうが阿Qより幸せだとは思えない。相手がいないために幸福な婚姻生活ができないことよりもお互い相手の事を心配していながら社会制度と身分制度の為に一緒にいられないほうがもっとつらいのではないかと思われる。エイは自分の気持ちについて直接表したことはないが彼の行為によって彼の気持ちを読者に伝えていた。一つはオタツの手紙が届いた時、もう一つはオタツがたずねてきた時である。小説の中にこのように描かれていた。「男衆はずっかり悄気て手紙をシャツのポケットに入れた。彼の顔を覆うたくて深い皺は心の苦悩を示したものが硬直しているようであった。……どのようにも私らはなるようにしかならない……そして森に伐木作業に出かけた。」「なるようにしかならない」と言う文はエイの無力感、現実への失望感を訴えていたのではないか。自分の妻と一緒に生活したいのは言うまでもないが二人とも自由のない身分が低い下人である。悩んで苦しんでどうしても自分の力で解決できないと諦めた時はその気持ちは顔の皺に化して彼の精神も痺れてしまったのではないか。オタツが訪れたときのエイの槌打ちもそうである。それはただオタツが持ってきたおみやげを恥ずかしがって打ったのではないと思われる。それは表面のものに過ぎない。オタツは来たがまた彼女は奉公先に戻らなければならない。自分の力で彼女を引き止めることもできないし、お土産らしいお土産を持ってくるさえもできないオタツももちろんここに留まるだけの才覚も力もないわけだ。「こんなにいなげなものは何にもならんがな」と言うの

は確かにエイの当時の心象風景である。こんな粗末なものは主人の丹下氏に喜んでもらうわけではない。喜んでもらわなければ世帯を持つことを許されるわけではない。もう諦めるしかない。もう自暴自棄しかないとエイは悩んでいたに違いない。自分の煩わしい気持ちはどのように表したら良いかわからず多分槌打ちに紛わすしか方法がなかったらう。

以上の分析に基づいて、阿Qもエイも可哀相な孤独な、その残酷な封建制度の下で正常な夫婦生活を求める権利までも奪われた封建制度の被害者であることが分かる。これは阿Qとエイの共通点、言いかえれば封建制度下に苦しみあがいている普通の平民の生活実態である。中国の阿Qであろうと日本のエイであろうとその封建制度が存在する限り幸せな生活が訪れるわけがないものなのだ。

### (3) 悲しむべき性格

性格からいえばエイと阿Qは違っているかもしれない。おとなしく内向的で、一心に奉公しているエイと比べると、阿Qはもっと滑稽で、最大の特徴はいわゆる精神的勝立法である。殴られても「俺はせがれに殴られたようなものだ」と自分を慰める。この特徴はエイには見えないようだが、忘れっぽさ、鈍感、無神経、無自覚などの面では二人は共通していると思われる。折檻されていたエイは丹下氏が離れて行ってしまい、起きても心配なさそうだとわかった時、起きてすぐ折檻されたときのつらさと苦しさを忘れたようで、「私」と一緒に興味深く丹下氏と木材商人のやり取りを見てまた玄人のように「洋の字は松山や雑木林の仲買人であります。さぞや洋の字は話を弾ませてをるに相違ないであります、ここから見れば一目でそれがわかりますがな」と説明してくれた。普通の主人への不満、怨言もひとつもなくてまったく楽しんでいるようだ。本当に忘れっぽく意志のないやつだ。また苛酷な雇主の折檻に対して反抗しようと

しないし逃げ出そうとする気もなかった。まさか昼寝をしたぐらいで自分は確かに悪いと思わないだろう。妻オタツの手紙を届いたときでもいつまでも悄気てはいなかった。森に出て気分転換ができた。阿Qもそうである。ひげの王に投げられてニセ毛唐に殴られて確かに屈辱だったが尼さんに意地悪をしてからもうすっかり忘れてしまい、一切の仇をとったような気になった。ところでエイと阿Qの共通点というは何より彼らの愚昧無知ではないか。小さかったときから何十年間ずっと一心に丹下氏に付き添っていたエイは五十七歳になってからもただの昼寝だけで残酷に折檻されたが雇主に憎みも持たないし不満も見えない。相変わらず丹下氏のことに強く関心を持っていた。自分の修道僧みたいな生活にときどき苦しんでいたが別に考えたことはなかったようだ。なぜ自分は五十七歳なのにただ十歳年上の丹下氏の折檻を受けねばならないか。なぜ結婚したのにオタツと一緒に生活できないか。ただ奉公がへまなのか。ただ家がないのか。エイは多分そのように思っていたのだろう。しかしそれは絶対に根本的原因ではない。阿Qは愚昧無知そのものである。自分の生活が苦しい。原因はどこにあるか彼は分からなかった。彼の考えでは彼の飯の種は小Dにとられていた。小Dも貧困の農民と一緒に団結して戦うべきなのに阿Qはそこまで覚悟していたわけではない。また呉媽に求婚しただけでなぜ殴られてそんなにひどい目に合っただろう。なぜ趙旦那は奥様をちゃんと持っていたのにもう一人若い妾を囲えるのだろう。阿Qは分からなかった。その制度に生まれその制度に育った彼の考えは、すでに旧思想に東縛されていた。彼は三教九流を尊び、人間の不平等に目覚めるはずがないのである。また彼を解放し、彼を救い中華民族を救うために起きた辛亥革命が何だか分からない。ただ流行に便乗して「革命、革命」叫んで革命はものを奪い女を奪うものだと言いはん

で無自覚のうちに辛亥革命の犠牲者になってしまったのである。つまり阿Qもエイも封建礼教、封建制度の被害者で封建制度に捻り曲げられた封建思想に縛られた無知の人間だったのである。封建制度の害毒で人間の本来のもの、人間の本来の姿までも失われていた。害毒を受けていながら痛みさえも知らないということから彼らの受けた毒がどんなに深いかが伺える。魯迅先生の話では「わが国の古代の頭のいい連中、すなわち聖賢と呼ばれる連中が人間を十等級に分類し、そこに高下の差を認めたのがこれである。この等級の名称は今では使われていないがその魂魄はまだ残っており、しかもますます悪辣になった……造物主が人間を造る際にすでに人は他人の肉体的苦痛をかんじられぬように、実に巧みな手が使われているがわが国の聖人と聖人の弟子たちは、造物主の欠を補って、さらに他人の精神的苦痛をも感じなくさせてしまった」という。中国の精神、思想特に中国の儒教を導入してそしてそれを思想支配の工具にして使った日本の支配階級もそのように被支配階級の思想を麻痺させたのだろうか。エイのような無知な人間が出てきたのはここにもあるのではないか。

## 2 創作意図と創作方法

魯迅先生の「阿Q正伝」は辛亥革命の不徹底さを風刺するために作られた小説である。創作の意図は「沈黙した国民の魂を呼び返す」という。作者自分も述べたように「眼底を通して中国の人生を描く。国民としての中国人の人生という集合体をその魂において描きたい」というのである。だから阿Qはある意味ではその時代の中国人の代名詞で中国四千年の伝統が作り出したひとりの悲しむべき人物である。言い換えれば、魯迅先生は阿Qの身にもものすごく多い重い物を背負わせていた。エイはただのエイである。閉鎖的な谷に暮らしていた下僕である。だから阿Qはエイより

もっと典型的であるといえる。阿Qという人物にはもっと多くの創作上の役目が含まれている。阿Qという人物の創作意図は、現在では、多くの人に認められ周知されていた。「丹下氏邸」の意図は何だろうか。井伏氏は「丹下氏邸」の序文やそのほかのところでいわゆる「農村文学」を書く気のないことを強調していた。農村物を書く動機の底には単なる周囲への流行的ノスタルジアとか、消えて行く生活様式へのロマンチックな神格化以上に深いものが潜んでいるのだと言おうとしているのではないか。深いものとは何だろうか。有りふれた田舎の人間たちの精神状態を真実に描き出すのだろうか。それとも真実の描写によって読者に何かを伝えようとしているのだろうか。地主の息子である井伏鱒二は多分魯迅先生のように鋭い筆で社会矛盾を描く作家ではないかもしれない。小説の中で苛酷な雇主にも時々人間味を持たせた。例えばエイの修道僧のような略歴を語るとき目に涙が浮かべた。また丹下氏の折檻に対してオタツもエイも別に憎しみが見えていなかった。だからこの作品の人間関係には植物の生命と交響している共生のモチーフがあり、アケビの蔓が一番大きな柏の木によじ登っているという説がある。そうだとすると寄生の蔓と大きな柏の関係は初めからそのようになっていたのではない。社会制度に捻り曲げられてそのようになったのではないか。社会に押さえられ社会に適応するために形成した異型な人間関係ではないか。自由社会ならば独立して快く暮したくない人はいないわけだ。社会矛盾、階級の限界を曖昧に円滑に描き出すのは井伏鱒二の妥協、調和かもしれないが自分の観点をはっきり出さず、ただ悲しい社会の現実をそのまま描き出して読者を掻き立て考えさせるのが井伏鱒二作品の右にも左も寄らない永久安定の魅力なのではないか。但しどんなに曖昧にユーモアに描いても現実には現実である。丹下氏はどんなに人間味を持っていて

も弱者の男衆に暴力を振るうとんでもない雇主、地主である。地主の息子である井伏鱒二は地主丹下氏に不満憎みを持っていたとは見えないが弱者エイへの同情憐憫ははっきりしている。小説の中に焼き物を掘りにきた好事家である「私」が「どうして男衆夫婦に世帯を持たしてやらないか」と丹下氏へ質問することとエイのために丹下氏の行ったことを探察したことが証明ではないか。妥協作家、政治的現状維持を支持する受動的な傍観者だといわれる井伏鱒二ではあるが悲しい社会現実、異型な人間関係の描写によって弱者である普通の農民への同情憐憫、彼らに自由に幸せに暮らしてほしいと言う気持ちを伝えていたのではないかと私は思っている。

また魯迅先生の阿Qは辛辣な筆で一刀で血を見るように阿Qを切り開いて読者に笑わせる、読者に考えさせるといえば、井伏鱒二のエイという老僕の魂の描写は半分剥き出し半分隠しであろう。だから阿Qを読んでから痛快淋漓、「丹下氏邸」を読んでから言の未だ尽くさずという感じが出てくるのかもしれない。それにしてもこの二篇の小説の書き方が似ているところもあると思っている。両方とも封建社会の悲しい社会現実の悲劇でありそんなに重苦しい話だが作者の筆によって、ユーモアの雰囲気描き出されている。もし「阿Q正伝」の笑いは阿Qのやることすること、愚昧無知の考えと思想からの産物だと言うなら「丹下氏邸」の笑いは方言をたくさん用いて作られたその閉鎖的な山谷の景物人情だけではなくて雇主の丹下氏の滑稽と男衆の捻くれた気立てにもあると考えられるである

う。いずれにしてもこの笑い、このユーモアは快いものではなくて、いわゆる灰色のユーモアであろう。笑いといっても涙のついている笑いであろう。もしかするとつらいからこそ笑いを選んでいたのでないか。この笑いがただ簡単な笑いではなくて長い、苦しい生活の中で民衆が言い換えれば生活者がひそかに育ててきた知恵である。偉大な作家たちはこの民衆からの苦渋の笑いを開花させ実をならせたのである。

### 終わりに

この二篇の小説の比較によって、両小説の主人公及び文章の創作方法などの共通点と相違点が見つかった。この共通点は偶然であるかも知れないが共通の東洋文化、共通の思想精神が今度の偶然に条件を提供したのではないか。魯迅先生も井伏鱒二先生もともにとても優れた文学者でありさらに多くの作品と結びついて展開できなくて残念に思っている。また今回の調査によって井伏鱒二の作品にとっても興味を持つようになった。今後続いて井伏鱒二の作品について研究したいと思っている。

### 参考文献

- 井伏鱒二研究 鶴田欣也 長谷川 泉  
井伏鱒二 作家の思想と方法 涌田 佑  
井伏鱒二全集 筑摩書房  
魯迅全集（中文版）人民文学出版社  
魯迅全集（日文版）学習研究院 丸山昇訳  
魯迅を読む 新島淳良